

## 12月の学習会の案内

平成27年12月9日

平成27年も残すところあと僅かとなりました。今年の語る会の後半は西日本集会へ向けての活動へ集中する形となってきていますが、そうした大切な時期を順調に進めていくことができているのも会を支えてくださる先生方のおかげと改めて感謝を申し上げたいと思います。ありがとうございます。

来年も何かとお忙しいとは思いますが、国語を語る会としましては、まずは6月の会へ向けて力を合わせて取り組んでいくことができればと考えています。引き続き先生方のお力添えを賜ることになります。よろしくお願いいたします。

さて、12月の会ですが、スケジュールの都合で日曜日開催となりました。ご都合が難しい先生もいらっしゃるかとは思いますが、ぜひ、大勢の先生方にお集まりいただければ幸いです。お待ちしております。

日時 平成27年12月20日(日) 9:30~12:00

※日曜日開催です。ご注意ください。

場所 岡山大学 教師教育開発センター東山ブランチ 1階 大会議室

TEL(086)272-0511 FAX(086)271-3455

連絡先 小出 真規(こいで まさき) TEL 090-5704-7339

m-koide@okayama-u.ac.jp (学校パソコン)

m.koide.freewill@icloud.com (携帯メール)

内容 西日本集会へ向けての教材研究および授業構想(グループごとに内容が異なります)  
実践内容の検討

<お知らせ>

※ 駐車場について

東山ブランチの駐車場をお使いください。

## 11月の学習会の報告

今年度は、3つのグループ(学びのつながり・発達段階のつながり・学習者のつながり)に分かれて、教材研究を行っています。当月もそれぞれのグループで研究を進めました。

### 田中先生より

今、教育界の改革へ向けて国で取り組んでいることについて。今までは義務教育の改革だった。きっかけはPISAの順位が下がったこと。2009年には方向性が示され、改善を図ってきた。その結果、小中はある程度成果が出てきた。一方で高校が変わらない。でも、高校に働きかけても難しい。高校を変え

るためには、大学。ということで、大学改革が急速に進んでいる。

文科省の6月の通知から、人文系や教育学部をなくすか、再編するということについて、それはおかしいという反論があがった。文科省としては、反論に対して丁寧な説明を追加する形にはなったが、方針として変える方向は撤回していない。大学はその方針のもと予算がつけられている。しかも教員養成のところは、上乘せで改革を迫られている。平成34年には改善された方向にいくということで6年計画が立ち上がっている。いまは第2期。来年から第3期。どういう対応をするか求められている。学習指導要領の改訂も入ってくる時期であり、大学改革もあいまって岡大も修士課程はやめようという議論もある。少なくとも変える相談をあげていかないといけない。教科教育の講座がそのままでは、うんと文科省がいわないだろう。もうやめたほうがいいのか、ということまで、追い込まれている。名称はかえても残すべきということと半々。教員養成は教職大学院に一本化すべきという考えを文科省は示している。教職大学院は教科教育をそもそも念頭に置いていない。学校経営上のことが多い。来年からは、教科教育のことも一定程度は入ってくるが、それを支援できる体制になっていない。その教員スタッフは、教員養成の教員と大学院は連動しないという制度設計になっているので、とても困っている。国際バカロレア（IB）を入試や教育に入れていくとか、持続可能な教育（ESD）などを入れている。ESDにどう貢献できるかという講座を作っていくという方向。

大学入試も変わらないといけない。高校が変わらない。センター試験という継続されていたものを平成30年には変えるように取り組みが進んでいる。高校基礎試験という判定試験と大学選抜試験という入試にいかす試験の2つの入試の検討が進んでいる。センターに変わるという点では、がらりと変わる。国語でいうと大きな4問が現状出されている。古文、評論、文学、漢文。古文漢文にいたっては、もう出てこないかもしれない。古典については、日本人の伝統的な考え方を形成するには一定の役割を果たしているという認識はあるので、どういう形になるかわからないが、融合問題として出てくるのではないかと。ジャンルの融合というより、課題解決のために一定の状況を提示し、問題を見出し、といったかなり斬新なものになっていくのではないかと。3つ程度の文章から共通する課題は何ですか。解決のためにどうしますか。論点は何ですか。といったものが考えられている。そこまで変わると、高校が変わらざるを得ないところはその通り。小中はある意味で、文科省の考えの方向性で改善が進んできたとはとらえられているが、まだもう一段変わらないといけないことになりそう。

そうした状況を踏まえてあらためてこの場にたってみると、その文章がしっかり読めるということだけではだめなのではないか。読むということを根源的にとらえなおす。書かれていることはこういうことですということがゴールで終わらない。書かれていることをどう評価するか、他の問題とどうつながっているのか、そういう考え方が提示されたとき、受け止める側の社会で考え方の交流が起こるのか、単独で考えるのではなく、いろいろな受け止め方をもって、交流し認め合うといったこと。そういった活動をする能力が求められていくのではないかと。

「2つのもうひとつ」について。学会で発表している。その中で「もうひとつのテキスト」と「もうひとつの読者」を出している。その考え方は深く読むということはどう受け止めるかということをつなぐという考え方。交流してどう調整していくかということとつながる。

深く読めるということは、自分とはちがう考え方をしている人の考えを取り入れていかないとできない。過去の人はどう読み取ってどこに着目してどう読み解いているのか、文法的にどうなのかということに注目していくということが「もうひとつのテキスト」ということ。注目すべき、どういう観点から読むかということがあまり明確にされないまま進められてきている。そこがもう少しクリアになってほしい。「もうひとりの読者」とは、過去の自分と集団の他者。過去、将来の人たちがどういう読み方をするか。

世界ではかなりふれはばが大きい考え方の中で、一つのことが起こる。そんな中でも地球としては一つ

であり、理解しあいながら、対応していかなければならない。というところが、「もう一つの読者」。2つの「もう一つ」という取り組みの過程において、国語に限らず、子どもたちに求められる能力を実現させていくことが求められている。かなり変わる。従来のものを極端にいうとぽんと捨てて、そこへいこうとしている。

多田さんの講演(附属中学校研究会)。ぽんと捨てて対話社会へという提案。でも、今までのものも必要。折り合いをつけて教育改革を進めていかなければならない。この会ではそういう部分をしている。改善しつつ、従来のことも取り入れつつ進めていかなければならない。頭がぐちゃぐちゃになる。それが大事。ぐちゃぐちゃでも、2, 3年たてば、大半の人が考えるようになって、落ち着いていくのではないか。徐々に確信がもてるように進めていければいい。だんだんこうかもしれないというものがつかめれば。

## 小川先生より

田中先生の話を受けて、この会としては、山のすそ野のあたりを動いていると感じる。最終的には、小学校でどこまでいけるかは考える必要がある。

(配布資料について)

筆者は信州大学の藤森先生だと思われる。

第1のレベルについて

やさしい反応やかわいそう反応など情意的な反応で深まりは認められない。めあてが広がっていく授業が展開される。2年生の後半からは、話題の一貫性の中で話をしようとする。すごい反応で話をしているという意識が2年生の3学期。教師の板書は理由より、ハートマークが主になるべき。拡散、連鎖型の反応と言える。

第2のレベルについて

学力をつけようと思うと、理由が大切。「○○と思います。わけは・・・」という話型が大切にされてきているが、理由が大切になってくる。板書もハートで終わってはいけない。理由を書く。共通点、差異点、ここまでだと累積的対話で止まっている段階。

第3のレベルについて

すごい、変化、つなぎ、など様々な反応から何を生み出していくかということ。資料にある藤森先生の提案と重なってくる。抽象的に書かれているが、今、私たちの会でやっていることと重なっている。

「天気を予想する」について

的中率が高くなっているという説明文。理由として科学技術の進歩にもうひとつの理由は国際的な協力。めあては、「的中率が高くなった理由を国際協力の視点からたしかめよう」となる。第1のレベルの視点からいくと、「900か所あるから高くなっている、同時刻だから、静止衛星があるから、高くなっている」「日本は影響を受けるから大切だと思う」といった子どもの読みが出てくる。それぞれが着目した言葉を根拠にするからレベル1

レベル2だと、「世界900はものすごい数なので、より多くの情報が得られると思います、同時刻だから、正確な情報が出てくるんだと思います、科学技術の進歩だけじゃなくて、今度はより遠くの広い範囲を調べているのでより正確な情報が得られるのだと思います」といったように言葉と言葉をつなげるところが出てくる。累積的のレベルがあがっている。采女先生の読みや読み方を深める発問について。「前の科学技術だけで十分なんじゃないの」でゆさぶると、子供は文章に返っていく。「不可欠なのです。」の意味がわかってくる。つなぎ反応をしてくる。前段落とこの段落をつなげて読んでくる。深まって確認

されて、両方の理由がなければ的中率が上がっていかないのではということになっている。田中先生のレベルには行っていないだろうが、国際的な協力、より多くの情報ということが実感をもってわかるようになっていくのではないかと、

自分たちの授業の流れ、話し合い活動の深まりを考えたとき、そうした姿がみられたらよいのではないかと。

## 田中先生より

小川先生が具体的にしてくださったので。ですが、1、2、3のレベルと対話のレベルの話について。あれ自体は、2にも3にも使える。1に探究的は出てこない。2には、累積も探究もおこりうる。3も同様。学習者自身が読み取ったこと、感想を発表していく。1年生からもできる。自分の感想と他者の感想がどちらがうのかについては、先生の手助けなくしてとらえられない。〇〇さんとちがって、〇〇さんと同じだと子どもはいうが、そうなのではないのが、低学年。3年生からは、そこが認識できるようになる。ちがうところから何を考えていけば解決できるかということが高学年。見通しをもって考える活動を先生が助ける。実際の授業でのイメージでもっておくと、教師の支援がどこの部分にかかればいいのか目安がもてる。

## 小川先生より

以前、指導案つくるときに、部分精読、読みと読み方を深める、ときて話し合いを概観するというところをしていた。この活動では、概観の活動が重要。「この言葉からこう考えたよ」としゃべってくる。子どもはどっぷり。意識していない。根拠と読みが見えていない。友達のもそう。そのときに黒板をみて対象化を図る。対象化することで、根拠や理由（読み）が意識できるようになる。そうなれば、授業の層がちがってくる

## 野崎先生のレポート発表

当日資料を参照ください。

## 采女先生より

本時は、グラフと写真を載せただけのワークシート。本文がないことで子供の一人読みに多様性が出た。点々をうつなど。低児の子は本文だけを書く子がいたが、多様性のある表現で一人読みができていたように思う。難点は机間指導が難しいこと。10分の書き込みを机間指導で把握するのが難しかった。交流ではどう発表すればいいかということで混乱していた。話型をつくってやることでつながっていった。グラフで意見を言い、山の写真で意見を言い、共通点として積乱雲と考えていたが、子どもは色々な発言をしてきた。板書の構造化も考えたが、難しかった。精読で想定していた読み深めを交流で発言する子もいて、深く追及できなかった。一人、二人ではなく、全体を底上げすることが大切だと反省した。

## 最後のグループ報告

### 「発達のつながり」グループ

1月に向けて直感をもたせるためにどうするか、1次をどうするかということについて話し合いを行った。1月には実践をしながら持ち寄る。田岡先生の授業の計画の話を進めた。

### 「学びのつながり」グループ

「わたしはおねえさん」の実践について。

2年生は、気持ち反応を大事にして使えるようにして、変化反応などにつないでいく段階。自分の経験と比べるということについてネーミングを作るなどして反応させていこうという話をしている。

「すみれちゃんシリーズ」について

自分の経験反応で語れることで、すみれちゃんの成長をとらえて変化にも目がむけられるようにしていこうかということ。何の反応を大事にしていくかを話し合った。

### 「学習者のつながり」グループ

- ・今まで話し合ってきたことと今後の進め方の見通しの確認
- ・累積的対話，探究的対話の授業作りの確認
- ・今後，5年生の先生で実践して記録を残していく。
- ・その後，2次をどのように読み進めていくかについて話し合いを行った。

## 田中先生より

(赤木先生の代読) 別ファイルで添付します。

## 小川先生より

説明文の直観で、「伝えたいことは何ですか」というように、結論部分に直観が来るというのは、先生が中心文をということをしてきているので、そうなる。子どもの思考ということだけでない。

「天気を予想する」について。結論部分の「自分で大切にしたい」の問い返しが1時でも行われたいといけな。そのときに武器になるのが、問い。題名に着目、中心文に、問いに着目する。というステップがある。

2年生、題名読みをする。題名そのものが伝えたいことを語っている。題名読みの1次もある。いつも題名、結論、問いとくるとパニック。発達段階、教材によって何ですか(直観を引き出すか)という整理が必要。6年生は問いがなくなる。最近、大事だと思うのは、小見出しをつけるというのが大事。問いに変わる話題提示が見つけられる。話題提示を問いと見立てて、何を伝えたいのかの根拠とする。ただ直観をとらえるなんだけど、ステップがある。

文学では、印象で10くらい。共通項でしぼりこんでいく。そういう1次の扱いはいる。2次の展開としては、気づき反応。注目した言葉(根拠)と理由をわかる。中学年の前半までで根拠が生まれてくる。解釈が大事になってくると理由が板書に位置付けていく。

「スローリーディング」(該当の本は、PHP新書かと思われます)について。文章を読んでいく中で、あらすじを理解しつつ味わっていく箇所が出てくる読み方。つなぎ反応、変化反応の根拠となる言葉に向いていく。一つの場面の中できらりと光ることばにどう着目させていきますか、ということをやっている。逆にいうと、速読のような授業も6年間のどこかで位置付ける。幅の広い読む力もつけてやらないといけな。

今日の野崎先生の授業を基本形としてとらえてもらえればいい。

文責 小出  
間違い等ありましたら、お知らせください。